最 終 講 義

「オリンピックにおけるレスリング競技について」

経営学部　　鈴 木 啓 三

1．オリンピックの歴史

1）古代オリンピックのはじまり

古代オリンピックは紀元前776年から紀元後393年まで1169年間、4年毎に行われていた。当時は領有をめぐった地域（都市国家）同士の紛争（戦争）が続いていた。この時代に何故オリンピック競技会が開催されたのであろうか。古代オリンピックは4年に1度の祭典であり、それは太陽暦と太陰暦の両方を知っていたギリシャ人が、そのずれを修正するために4年毎に農事に関わる儀式を行い、これが紀元前776年から競技を中心とした祭典に変わったのではと考えられている。

それは全能の神ゼウスをはじめ多くの神々を崇めるための、神域における体育や芸術の競技祭であった。そしてその中で最も盛大に行われていた場所がギリシャのオリンピアと言われている。当時のギリシャにはオリンピアで行われていた「オリンピア祭典競技」のほかに、イトモスの「イストミア競技祭」、ネメアの「ネメア競技祭」、デルポイの「ピュティア競技祭」は、古代オリンピックと並んで4大祭典競技と呼ばれていた。このように古代ギリシャ人にとって、スポーツの祭典は生活から切り離せないものであり、ギリシャを中心とした宗教行事であった。これは全能の神のもとで、地域間の紛争を休止させるために最も良い方法だったと考えられる。

2）古代オリンピックの様々な種目

平和を願う崇高な精神から生まれた競技祭は、「走る」「跳ぶ」「投げる」「格闘する」がオリンピック競技の原点となっている。

古代オリンピックで最初に行われた競技は、1スタディオン（192.27m）のコースを走る競争だった。その後、スタディオンの距離を1往復（384.54m）するディアウロス走、約10往復（約3,800m）するドリコス走、紀元前708年の第18回大会からペンタスロンといわれる5種競技が行われ、スタディオン走、幅跳び、円盤投げ、槍投げ、レスリングの5種目を１人の選手が行う競技で、3種目以上を制した者が優勝者と認定されていた。そしてペンタスロンで行われたレスリングが、紀元前668年の第23回大会から単独の競技として実施された（表1）。立ったままの姿勢から（投げるために片膝を付くことは認められていた）相手を持ち上げて投げる競技で、正しく美しいフォームで投げなくてはいけなかった。時間制限はなく、勝敗が決するまでに長時間かかる過酷な競技であった（図1）。

3）裸で出場した選手たち

古代オリンピックに出場する競技者は裸で競技を行い、裸でスポーツを行ったことが古代ギリシャの特徴でもある。躍動する肉体は多くの観客を魅了し、芸術家はその肉体に魅了され、鍛えられた若々しく美しい身体を賛美した。彼らはこうして「円盤投げ競技者像」「槍を持つ競技者像」など数多くの身体美の極致というべき優れた芸術作品を今日に残している。古代オリンピックは身体のみならず、文化交流も盛んに行われ、哲学者は各地を講演し、デルポイの「ピュティア競技祭」では文芸の競技が行われ、今日でも優秀な詩人に月桂冠が授与されている。肉体と精神の統一を図る古代ギリシャの思想は、多くの優れた競技者、芸術家を生んだ。哲学者らは「健全なる精神は健全なる身体に宿る」の言葉を今日に伝えている。

このように古代オリンピックでは、スポーツを愛するファンはどのような苦労もいとわず、ギリシャ人にとってオリンピックを観戦せずに生涯を終えることは大変不幸なことだった。アテナイのパン職人は、生涯で12回のオリンピックを観戦したと自分の墓石に刻ませた。ギリシャの哲学者らは、オリンピックについて「人間界においてここまで神に愛されたものはない」と熱く語っている。

4）古代オリンピックの終焉

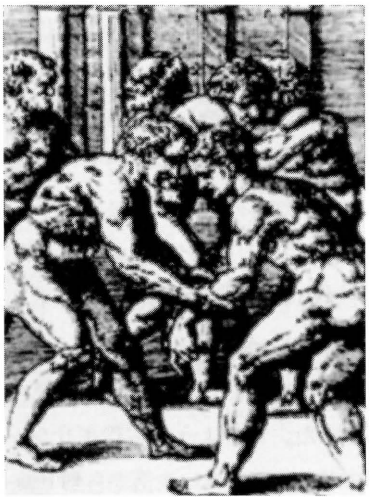
紀元前146年、ギリシャはローマ帝国に支配された。古代オリンピックはギリシャ人以外の参加を認めていなかったが、ローマが支配する地中海全域の国から競技者が参加するようになり、次第に変容を遂げていった。祖国性が次第に失われ、職業競技者が優勢を占め、収賄が横行するなど競技の価値そのものが失われつつあった。ローマ支配の中、崇高な精神で生まれたオリンピックも次第に色褪せ、ローマの詩人ユナーリスが、「健全なる身体に健全なる精神宿かれし」と憂いの詩を詠っている。紀元後392年、ローマ皇帝テオドシウスがキリスト教をローマの国教と定めたことで、オリンピア信仰を維持することは困難となった。最後となる古代オリンピックは、紀元後393年の第293回オリンピック競技大祭であり、それまで1169年間受け継がれた伝統は終焉の時を迎えた。

古代オリンピックがこれほど長く続いた要因

表1.古代オリンピック（紀元前766年～紀元後393年まで）の主な競技種目

競技種目	開始した年	競技種目の内容
スタディオン走	前776	197.7m(1スタディオン)競争
ディアウロス走	前724	スタディオンの距離を1往復(384.54m)する競争
ドリコス走	前724	約10往復(3,800m)する競走
5種競技(ペンタスロン)	前708	スタディオン走、幅跳び、円盤投げ、槍投げ、レスリングの総合競技
4頭立て戦車競争	前680	1周6スタディオンの競馬場を12周(約14,000m)する
レスリング	前668	第23回大会から単独競技
ボクシング	前668	
競馬	前648	競馬場を6周(約7,000m)する
パンクラチオン	前648	何をしてもよい格闘技
少年スタディオン走	前632	少年の競技
少年レスリング	前632	少年の競技
吹奏者競技	前396	最も遠くまで音色が届く者が、大会中に勝者を称える
ヘラルド競技	前396	最も遠くまで声の通る者が、大会中に勝者の氏名などを布告する

図1.古代オリンピックのレスリング競技



は何か。1200年近く人々を魅了し続けたものは何か。スポーツをこよなく愛したアテナイの哲学者エピクテトスは、「オリンピックは人間が生きることのメタファー（夢や人の行動全般）だ」と語った。当時のギリシャの人々の生活は苦難と試練の日々であり、また夏の強烈な日差しの中、誰もが自分勝手なことを主張しいていた。街は騒がしく、人々の道徳観は薄れ、つまらないことに絶えず悩まされていた。しかし、「人はすべてに耐える」と言い、何故なら、「人生もオリンピックも決して忘れられない壮大な見世物だから」と。

5）近代オリンピックのはじまり

古代オリンピックの火が途絶えて1500年余の時が流れた1896年、フランス人のピエール・ド・クーベルタン男爵の提唱で第1回近代オリンピックが古代オリンピックの故郷であるギリシャ・アテネのパナシナイコ・スタジアムで開催された。第１回大会は、1986年4月6日～15日までの10日間行われた。実施された競技は、陸上、水泳、体操、レスリング、フェンシング、射撃、テニスの8競技43種目であり、ウエイトリフティングは体操の1種目として実施された。参加者は14ヶ国241名が参加し、古代オリンピック同様、女人禁制の大会だった。

クーベルタンがオリンピックによって目指したのは、スポーツがもたらす教育的な効果による人間の変革であり、社会変革である。当時、知識ばかりを重視する学校に対してスポーツ活動を取り入れるよう提案し、知育・体育・徳育のバランスがとれた教育の実現を目指したものである。クーベルタンが提唱したオリンピックの理念を「オリンピズム」と言い、それはスポーツを通じ、フェアプレーの精神のもとに身体と精神を鍛錬し、若い人々が文化や国の違いなど様々な差異を超えてお互いに理解し合い、友好を深めて、さらには地球の平和にも貢献していこうということである。「より速く、より高く、より強く」と言う言葉がオリンピックのモットーであるが、これはオリンピック憲章14条で規定されており、オリンピックムーブメントに関わるものは（他より）抜きん出ることが求められると説明されている。モットーの具現化がオリンピックの金メダルであろう。

108年振りに行われた第28回アテネオリンピックは、2004年8月13日～29日までの17日間、202ヶ国11,099名、28競技301種目という史上最大のオリンピックの祭典となった。日本からは男子141名、女子171名、総勢312名という選手団を形成し参加した。女人禁制の時代から多くの女性が競技に参加する時代となり、今日の近代オリンピックは世界中の人々から愛される最大のイベントとして発展している。

2．オリンピックのメダル

1）日本のメダル獲得推移

日本は夏季オリンピックにおいて、これまで114個の金メダルを獲得している。地元開催の1964年第18回東京大会での日本は金メダルを16個獲得し、国別ではアメリカ、ソビエトについで第3位となった。レスリングは金メダル5個を獲得する大活躍だった。昨年（2004年）の第28回アテネ大会の日本選手は大活躍し、東京大会以来の金メダル16個を獲得した。レスリングは初めて女子も4階級採用され、日本は金2、銀1、銅1と全階級メダルを獲得する活躍だった。国別では第5位であり、これは1984年第23回ロサンゼルス大会以来の一桁台である。メダル総数は史上最高の37個を獲得した。

レスリングにおいて初のメダルを獲得したの

は、1924年第8回パリ大会で銅メダルを獲得した内藤克俊選手です。当時、アメリカのペンシルバニア州立大学レスリング部主将だった内藤選手は、ケガをおしての苦しい戦いを続けながら、まさに根性で勝ち取った銅メダルであった。今から80年以上前にアメリカに渡り、大学のキャプテンまで務めていた内藤選手の苦労は想像を絶するものと考えられる。

戦後初となる1952年第15回ヘルシンキ大会は、日本が16年ぶりに参加した大会である。日本人唯一の金メダルを獲得したのが、レスリングの石井庄八選手である。また1952年ヘルシンキ大会から2004年アテネ大会まで、50年以上に亘ってメダルを獲得し続けているのがレスリングである（表2)。

2）競技別獲得金メダル

競技別獲得金メダル数では、レスリングは柔道、体操に次いで22個の第3位である。比率では19%であり、日本スポーツ界に対して多大な貢献度である（表3)。アテネでの金メダル獲得数においても、レスリングを含めた上位５位までの競技団体が金メダル16個の総てを獲得している。また、過去の大会からの金メダル獲得競技は10競技のみである。

3）日本レスリング金メダリスト

レスリングの金メダル22個の中、1968年第19回

表３．夏期オリンピック競技別獲得金メダル

順位	競技	金メダル数	アテネ	獲得比率
1	柔道	31	(8)	27.2%
2	体操	28	(1)	24.6%
3	レスリング	22	(2)	19.3%
4	水泳	18	(3)	15.8%
5	陸上	7	(2)	6.1%
6	バレーボール	3		2.6%
7	ウェイトリフィティング	2		1.8%
8	馬術	1		0.9%
8	ボクシング	1		0.9%
8	射撃	1		0.9%
合　計		114	(16)	100.0%

表2．オリンピック各大会における日本のメダル獲得推移

年	20	24	28	32	36	52	56	60	64	68	72	76	84	88	92	96	00	04	合計
金	0	0	2	7	6	1 (1)	4 (2)	4	16 (5)	11 (4)	13 (2)	9 (2)	10 (2)	4 (2)	3	3	5	16 (2)	114 (22)
銀	2	0	2	7	4	6 (1)	10 (1)	7 (1)	5	7 (1)	8 (2)	6	8 (5)	3 (2)	8	6	8 (1)	9 (1)	106 (15)
銅	0	1 (1)	1	4	8	2	5	7	8 (1)	7	8	10 (4)	14 (1)	7	11 (1)	5 (1)	5	12 (3)	115 (12)
合計	2	1 (1)	5	18	18	9 (2)	19 (3)	18 (1)	29 (6)	25 (5)	29 (4)	25 (6)	32 (8)	14 (4)	22 (1)	14 (1)	18 (1)	37 (6)	335 (49)
国別金メダル獲得順位			15位	5位	8位	17位	10位	8位	3位	3位	5位	5位	7位	14位	17位	23位	15位	5位	

※( )内はレスリング競技のメダル獲得数

メキシコ大会の金子正明選手と1972年第20回ミュンヘン大会の加藤喜代美選手は専修大学の卒業生であり、本学教員の佐藤満先生は1988年第24回ソウル大会の金メダリストである。また、2004年第28回アテネ大会の吉田沙保里選手の父親と伊調馨選手の指導者は専修大学の卒業生である（表4）。

3．思い出

1）1972年第20回ミュンヘンオリンピック

日本代表の監督として参加した大会において、前述した専修大学卒業生の加藤選手と前年まで世界選手権2連覇を達成していた柳田英明選手の2名が金メダルを獲得し、責任者としての役割を果たした思い出深い大会であった。と同時に、もう一つの思い出深く悲しい大会、出来事があった。

それはオリンピック会場内のイスラエル選手村に武装したゲリラが突如侵入し、イスラエル人選手とコーチの2名を殺害し、残りの9名を人質に取った。これにより、平和の祭典であるオリンピック競技が中断されたのである。ゲリラはイスラエルに収監されているパレスチナ人234名の開放を要求したもので、西ドイツ警察の人質解放計画が失敗し、人質となった9名全員が死亡する最悪の結果となった。翌日、イスラエル選手団の追悼式が行われ、オリンピックは34時間ぶりに再開された。この中に多くのレスリング選手が含まれていたのである。私にとって歓喜と共に、哀悼の意を表する気持ちが入り混じった大会であった。

表4．日本レスリングオリンピック金メダリスト一覧

No.	開催年	開催都市	選手名	No.	開催年	開催都市	選手名
1	1952	ﾍﾙｼﾝｷ	石井庄八	12	1968	ﾒｷｼｺｼﾃｨ	宗村宗二
2	1956	ﾒﾙﾎﾞﾙﾝ	池田三男	13	1972	ﾐｭﾝﾍﾝ	加藤喜代美
3	〃	〃	笹原正三	14	〃	〃	柳田英明
4	1964	東京	吉田義勝	15	1976	ﾓﾝﾄﾘｵｰﾙ	高田裕司
5	〃	〃	上武洋二郎	16	〃	〃	伊達治一郎
6	〃	〃	渡辺長武	17	1984	ﾛｻﾝｾﾞﾙｽ	富山英明
7	〃	〃	花原勉	18	〃	〃	宮原厚次
8	〃	〃	市口政光	19	1988	ソウル	小林孝至
9	1968	ﾒｷｼｺｼﾃｨ	中田茂男	20	〃	〃	佐藤満
10	〃	〃	上武洋二郎	21	2004	アテネ	吉田沙保里
11	〃	〃	金子正明	22	〃	〃	伊調馨

2）2004年第28回アテネオリンピック

昨年のアテネオリンピックはレスリング協会副会長として参加した大会であった。レスリングに関わり50年以上になり、他の競技団体を含めた多くのオリンピック関係者と友好を深めた大会だった。スポーツを愛する人々が時間を忘れて語り合うことは、本当に素晴らしいものである（写真）。そして私の関係する選手たちが活躍することに涙し、改めてスポーツの意義、そしてクーベルタンが提唱したオリンピックの理念を実感する。

3）専修大学卒業生のプロレスラー

■長州力（新日本プロレス）：ミュンヘンオリンピック代表

1972年ミュンヘンオリンピックの時、長州力（吉田光雄）は本学3年生であり、将来性に富んだ有能な選手であった。まだ専修大学の学生だった長州を私はどうしてもオリンピックに出場させたかったが、韓国では代表として連れて行かないという事情だった。そこで私は、当時の在日本大韓体育会本部の延氏はじめ役員の方々に出場依頼し、ようやく快諾を得た。そのご好意に深く感謝し、私が責任者として日本代表チームと一緒に出発した。試合は3回戦で敗退したが、重量級の選手として大変素晴らしい内容の

試合だった。次のオリンピックでは確実にメダルを狙える選手に成長すると確信し、ミュンヘンを後にした。

■馳　浩（文部科学副大臣、衆議院議員）：ロサンゼルスオリンピック代表

馳浩はレスリングでもチャンピオン、学問でもチャンピオンと言えるぐらい本当に文武両道、全てにおいて完璧な学生でした。卒業式はロサンゼルスオリンピックの最終予選とぶつかり出席できず、後日に文学部中田ゼミにおいて馳のために武道館を貸し切り、ただ１人のための卒業式を行った。馳は専修大学の教員としても嘱望されていたが、すでに大学入学時に星陵高校で国語の先生として約束されていたため、中田先生も断念した経緯がある。夢であったプロレスラーにもなり、今では教育界のナンバー２である文部科学副大臣という大変なポストに就いたことも、すべて馳の真摯な態度と努力の賜物である。

■中西　学（新日本プロレス）：バルセロナオリンピック代表

中西の入学時は決して大きな選手ではなく、反対に線が細く不器用な選手であった。しかし、持ち前のひたむきな努力を重ね、身体が大きくなりそれと共にレスリングもめきめき強くなった。就職は和歌山県教育委員会に入りオリンピックを目指していたが、大食漢のために食事代だけで地方公務員の給料を使い果たしてしまうほどだった。それでは生活ができないということから、当時新日本プロレスに所属していた馳の誘いで新日本プロレスに入社しオリンピックを目指すこととなった。バルセロナオリンピックから世界とアジアの予選が採用され、日本重量級にとってオリンピックの代表は大変厳しい状況であった。しかし中西はアメリカへ長期レスリング留学（ペンシルバニア州立大学）を行い、その厳しいオリンピック予選を勝ち抜きオリンピック代表となった。留学時の逸話であるが、アメリカ人のマクドナルドでのランチは当時約3ドルが平均であったが、中西は20ドル以上も食べていたことから有名人になっていた。当時のコーチは家庭に招いてパスタを出す時は、バケツに入れて食べさせたそうである。

以下省略；

■秋山 準（ノア）：学生チャンピオンからプロへ

後列　左から
伊調姉妹恩師　沢内さん（専大OB）／文部科学副大臣　馳浩先生（専大OB）／
ＴＶ朝日アナウンサー　森下さん／専修大学　佐藤先生／専修大学　久木留先生
前列　左から
専修大学　鈴木啓三／マラソン解説者　増田明美さん／
日本レスリング創始者　八田一郎初代会長ご子息（アメリカ在住）

■田中章仁（Ｋ１＝ＦＥＧ）：全日本５連覇中、北京オリンピックを目指す

４．何故、金メダルを獲得できるのか？

１）夢

大きな夢、夢の実現化

２）計画

目標の明確化、目標達成の計画

３）心構え

全てに真剣に取り組む、妥協を許さない、プラスアルファの努力

４）自信

積極的思考、肯定的思考

５）決意

揺るぎない信念、挑戦した選手のみチャンスがある

これらの５つの要因は、オリンピックだけではなく、我々の人生の成功においても大変重要と思われる。レスラーは金メダルという大きな夢を目指し、夢の実現化のために計画を立て、日々妥協を許さず頑張っている。学生諸君も大きな夢を持ち、積極的にそれぞれの目標に挑戦してもらいたい。夢の具現化のために。諸君の健闘を期待する。

５．馳浩文部科学副大臣（昭和59年度文学部国文学科卒業）の話

私が専修大学入学を選んだ理由は、鈴木先生にスカウトをいただいたからにほかなりません。私なりに、大学に進学するに当たって条件がありました。

一つには、国語科教員の免許を取得できること。

二つ目は、そのために優秀な教授がいること。

三つ目は、大学と体育寮と道場とが近距離にあること。

四つ目は、その大学が強く伝統があること。

五つ目が一番大切な部分で、指導者を尊敬できることでした。

当時のこんな私にも、国体で優勝した後には十数大学のレスリング部のスカウトに来て頂きましたが、迷うことなく鈴木先生の専修大学を選びました。スポーツ界には珍しく紳士的で知的な鈴木先生は、人生を決める重要な大学の４年間を託するにふさわしい指導者としての風格と人懐こさと、情熱を持っておられました。とりわけ、怪我に対しては細心の神経を使われる監督であり、絶対に学生に無理をさせませんでした。ともすると、学生リーグ戦や学生王座決定戦の団体戦では、チームの勝利のためにと怪我の無理を押して出場させたり減量させたりする指導者が多い中で、いつも学生の人生の将来を考えた判断をなさいました。当然、個人戦であっても、後遺症の残るような事態にならないように、未然に学生の心身の痛みを分かち合うような姿勢を指導者として崩すことはありませんでした。

今では私が鈴木先生の後を引き継いで監督を務めております。まだまだ足元にも及びませんが、常に選手の大学卒業後の人生を念頭において指導することを心がけております。

また、レスリング競技で五輪や世界選手権に数多くの選手を輩出したにとどまらず、プロの世界にもレスラーを送り込んでいます。吉田光雄（長州力）、馳浩、中西学、秋山準。いずれもプロレス界を担う人材として活躍しています。その功績の根底にある指導力をこそ、評価すべきだと思います。

レスリング部の指導ばかりでなく、日本レスリング協会の役員としてや、本学のいくつもの

学生指導の役職を勤められました。「鈴木先生なら」と、鈴木先生の教え子の就職を世話してくださった企業も数知れません。教育に終わりはなく、教壇を降りることになっても、いつでも道場に来て暖かいまなざしを現役選手やわれわれ指導陣に注いでいただきたい。

「了」

【引用・参考文献】

・日本オリンピックアカデミー編（2004）；21世紀オリンピック豆辞典，楽，39-40，106-114.

・JOC監修（1994）；近代オリンピック100年の歩み，ベースボールマガジン社

・日本オリンピック委員会JOC；
http://www.joc.or.jp/